

松村神父の勝手に独り言

2020年4月11日 復活徹夜祭に向けて

今日も独り言を語ります！どうぞ垣間見てください。

復活徹夜祭はキリスト信者にとって最も重要な祭儀であり、大切なとき。私たちの信仰の出発はここから始まりました。世の中ではクリスマスが有名です。確かに私たちの神、父の独り子、救い主イエス・キリストの誕生がなければ復活の出来事まで到達できません。しかし、それは歴史の中における重要性であって、信仰の視点から考えると復活の出来事なしにはキリスト教まで到達することはありませんでした。ですから、私がいつも説明するときにはクリスマスは“月”、復活は“太陽”として捉えることが大切と伝えていきます。光の出発は太陽から始まるからなのです。一人の人が、人類の罪のために死ぬとそこで終わりとして理解されていたことが、イエスの復活によって、その死は終わりではなく、新しい命があると示しました。私たちのために一度死んで、帰って来て、「ほらね！」「信じる人は、復活させてくれるんだよ！」と示してくれたのです。私たちの信仰は、人イエスの誕生や奇跡を起こした偉人イエスという捉え方ではなく、人類で初めて前人未踏の死を乗り越え、復活に到達したイエスへの信仰こそ、キリスト教の確信であり、ユダヤ教からさらに発展した、生き活きと生き続ける信仰なのでしょう。私たちは目に見えるものばかりを信じて生きている弱さを持っています。でも今、コロナウイルスという見えない恐怖に脅かされています。これを乗り越えるにはやはり目に見える“マスク”や“消毒液”などでは限界があります。一人一人のいのちを守ろうという“生き方”と他者に影響を与えないよう配慮する“隣人を思いやる心”という見えない力こそ私たちが大切にできる力なのでしょう。「見ないで信じる人は幸い」とイエスが語るように、「信じて生きる」ことは、復活から学ぶ大きな指針なのです。

お金やiPhoneによる情報に神経をすり減らして入手しようとする現代、気が付くとそれらに逆に使われる奴隷となった私たちが居ます。一つの情報で右往左往し、お金を積んで実力行使しようとする人々が存在します。決してそれをすべて悪とは言いませんが、それが共通善のためなのか、誰かを救うために私たちが奉仕の立場をとっているかによって、その評価は変わります。

そこに心はありますか？ある時、こんなことを考えたことがあります。心はどこにあるのだろうか？と。日本人は心臓の位置に指さして「ここに心がある！」と答え、欧米人は頭を指さして「ここに心がある！」と応えます。でも、私は人と出会ったときにその人とのちょうど真ん中に「心がある！」と感じ、また遠くの人を思ったときにその中間に「心がある！」と感じます。“心”は誰かと対面したときにはじめて登場するのだと。確かに一人で思いにふけり、自分のことを思ったときには“心”はないのかもしれませんが。ただ“考えている”だけなのかもしれません。心は必ず誰かがいないと湧き起らない不思議なもの。自分のためだけには出てこないものじゃないかと感じます。これこそイエスが教えてくれた「隣人愛」という概念なのかもしれません。誰かとともにいることの大切さ。私たちの“心”を使うためには誰かを必要とするのです。ただ正しいかどうかは知りません。なんせ独り言です。

さて、復活徹夜祭には通常とは異なり、「光あれ！」と創造の出来事を思い起こし、私たちの心にイエス・キリストの光を示す“光の祭儀”があり、神に信頼したものが救われた体験に耳を傾ける“聖書朗読”があり、信じた私たちが、改めて洗礼を更新し、罪の洗い清められたことを起こす“洗礼式・洗礼の更新”があります。私たちキリスト信者となったその起源をもう一度思い起こしたいものです。イエス・キリストが具体的に私に手を差し伸べ、引っ張り上げて弟子として選ばれたことを。キリストを生きるものになるために、決して自慢できない私、自分の罪を洗い清め、最後の晩餐の席につかせてもらったことを。そしてキリストの指示に従って今なお聖体によってキリストと一致したことを思い起こし、人々に奉仕する勇気と力を与えてもらい、派遣して下さったことを。

復活徹夜祭は、このようにキリストの復活が、永続的に普遍的に私たちに勇気と力と、共通善に奉仕するものとしてその使命を与えるため、キリストが寄り添うために復活した記念日です。そういうられるとしっかりしなきゃなあ。奮起して歩まなきゃなあと考えさせられます。それぞれの場で、限りある状況の中でもできることはありますね。誰かを思いませんか、そこに心を用意しませんか！

コロナで苦しむ今、逆に自由を見つけましょう。・・・心は自由ですよ。

.....という独り言でした。